

氏は生前、同社制作の専門誌『テニスマガジン』にコラムを寄せていました。亡くなった後、日記に書かれた「この一球を本にしてほしい」という遺志を富美子夫人が発見し、連載記事の内容を一冊にまとめることになったそうです。

筆者が驚いたのは全200ページの半分を割り、6万字あまりを使って「スポーツマンシップ」について語っていることです。

近年のある調査で、大学生200名のうち「スポーツマンシップ」という言葉は97%が知っているが、説明できるのは僅か1%という発表があります。スポーツマンシップについて統一の見解がないことを示す調査結果かもしれませんが、福田氏の『この一球』にはテニスにおけるスポーツマンシップが規定されています。現代の日本スポーツにおいては、選手宣誓時にスポーツマンシップが用いられるように、それは試合における倫理的・道徳的な側面を指すことが多くなっているように感じます。しかし、福田氏が言うスポーツマンシップは、もっと広義で網羅的です。僭越ながら、要約すると以下のことが述べられています。

「まずは、そのスポーツが好きであることが大切。スポーツはあくまで趣味であり、自分が好きでやっているのが辛いことがたくさん転がっていて無理が生じるのも当然である。その無理を無理と感ぜないで楽しむことが、これもまたスポーツである。スポーツでは勝とうとして闘志を燃やし、体力や精神力を鍛えジェントルマンを目指すこと。ジェントルマンは自制ができ、正直であり、公明正大である。テニスの根本は、この一球を無心で打つこと。これにはテニスの技術的・精神的な基本を理解していないといけないうし、日頃毎日の積み重ねがないとできないものではない。そしてまた、テニスは代わりがないことに意義がある。勝敗は絶対であるが、ハードファイトである故に、いかにプレーしたかが大事で、スポーツマンらしく負けることがテニスの第一要件である。規制を守り、自分を誠にし、人をあざむかず、相手を尊敬して、真剣にプレーし、フェアプレーに終始することが真のスポーツマンであり、グッドルーザーに近づく。これら全てが人間形成に集約され、良い人間になれる。人間がよくなくては、真の勝利はない」

上記のことがよく示された福田氏が挙げるスポーツマンシップの劇的シーンを以下に引用します。

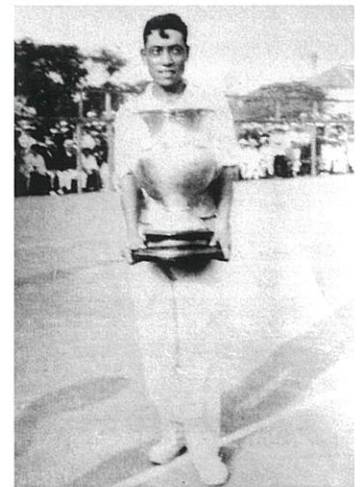
「イギリスとオーストラリアのデ杯戦の有名な話、ふたりの偉大なスポーツマン、テニスの驚異的な大家、イギリスのパークと、オーストラリアのブルックスが、重大なマッチを、戦っていたときだった。パークはセット2-1でリードし、3度目のマッチポイントを迎えた。彼は深いドライブで、ブルックスをコートから追い出して、それについてすぐネットへ進んでいった。ブルックスはロブを上げたが、短かった。パークは猛烈にボールを叩いて、ブルックスのコートに決定的ショットを放った。だが彼はラケットを長く振り降して、フォロースルーしたので審判がだれもわからぬほどに、ほんの軽くネットに触れた。『ゲームセット・マッチ・パーク』と、審判はコールした。ブルックスは前進して、笑いながら祝意の手をさし出した。パークはボールを打った場所にとどまりながら、審判に向かって『ミスター・アンパイア、私はネットを打ちました』と言った。ブルックスは祝辞を述べようと、なお黙って立っていた。『ポイントがブルックス君のもの。デュース』とアンパイアはコールした。ブルックスは延ばすことのできない、最後の

チャンスを速やかにつかんだ。試合も待望のデ杯も、遂にオーストラリアのものとなった。パークがスポーツの伝統に従ったことを、テニスマンはだれひとり疑わなかった」

「この一球は絶対無二の一球なり（中略）これを庭球する心といふ」。本稿の冒頭でも触れたこの『庭球規』は、福田氏が1941年、44歳のころに早稲田大学庭球部の部員に贈ったテニスと向き合うための掟や心構えです。

額装された直筆の庭球規は今日も部室に掲げられています。

プロテニス選手の誕生やジャパンオープン初開催から50年、テニス界は変貌を遂げました。ラケットをはじめとするギア、プレスタイル、指導者・施設の増加、科学的トレーニング、戦術と分析、グローバルなツアー大会の確立、プロ選手が海外で戦い抜くための環境構築あるいはメディア普及と商業化などです。何一つ変わらないのは、テニスが育むスポーツマンシップが今日まで絶えず続いており、その発揮において他のスポーツを凌ぐものがあることです。最初の一球から、最後の一球が決まるまで、無心で打ち込む精神が人を育て、人に感動を与えています。



第1回全日本選手権に優勝し、ニューヨークカップを手にする福田氏



早稲田大学庭球場で愛用のパイプを手にする福田雅之助氏

【参考文献】『テニスこの一球』（福田雅之助著、1986年、ベースボール・マガジン社）／『図説テニス事典 ENCYCLOPEDIA OF TENNIS』（福田雅之助ほか、1973年、講談社）／『佐藤次郎』（福田・針重共著、1935年、早稲田大学庭球部、稲門テニス倶楽部）／『日本テニスの源流 福田雅之助物語』（岡田邦子著、2002年、毎日新聞社）／『昭和のテニス侍』（宮城淳著、2022年、日本文化出版）／『パイプ随筆』（青羽芳裕編、2014年、未知谷）／『この一球、この100年』（2004年、早稲田大学庭球部・稲門テニス倶楽部）／『テニス指導教本Ⅰ』『テニス指導教本Ⅱ』（日本テニス協会、2015・23年、大修館書店）／『スポーツマンシップとは何か？』（谷釜尋徳・渡邊瑛人、2020年、スポーツ健康科学紀要17巻）